



磯 春樹さん

(びわこ学園医療福祉センター野洲元職員)

大阪市生まれ。漠然と「ひとの役に立ちたい」との思いを抱きつつ、学生時代に友人に誘われ障害者福祉施設の奉仕作業に参加した際に衝撃を受け、「自分にはぜったい無理」と思う一方で、「どうせやるのだったら」との思いもあり、障害者福祉の領域へ。つてをたどり、びわこ学園①にてアルバイトをすることになります。様々な葛藤を抱きつつも、びわこ学園の「伝えあい、揺さぶり、引き出し、たしかめあう」風土の中、たった一人の利用者のことについて夜更けまで熱く語り合う先輩たちの姿を目にするうち、いつのまにかそこに引き込まれていったそうです。また、田中徳吉さんとの物語づくり②をはじめとして、利用者のありのままの表現を受けとめ、世間とつながっていくことが職員としての役割だとの思いを抱くようになられました。定年退職した現在も、学園で教えてもらったことを還していけたらとの思いから、入浴介助などのボランティアとして学園と関わり続けておられます。

ひとの役に立ちたい

齋藤 びわこ学園でアルバイトをするようになられたきっかけというのは。

磯 全然知識もないんですけども、漠然と人の役に立つ仕事ってないかなって思ったんですね。たまたま福祉科で勉強してる友だちがいて、先生にきいてみるかってなって、滋賀県にびわこ学園というところがあつて、そこは年がら年中人手不足やと、そこやつたらバイトさせてもらえるんじゃないか、一回電話してみいみたいなことになって、ほんで電話したら、すぐ来てみたいな感じやつたんですよ、ほんでバイトをしたんですね。

齋藤 それがおいくつくらいの時だったんですか。

磯 二二くらいかな。それでバイトをずっと続けてたんですけど、ある時、リーダーだった人に、磯君、これからどうするの？職員になりたいの？って言われたんです。ほん

①びわこ学園・・・社会福祉法人びわこ学園。糸賀一雄氏によって創設されました。昭和二十八年に、滋賀県立近江学園の中で、特に医療的ケアを必要とする療育グループ（杉の子組）が編成されたことが始まり。

②田中徳吉さんとの物語づくり・・・徳吉さんは、びわこ学園生。磯さんが関わる以前から、職員が、徳吉さんがつくられる詩をききとるというやりとりがなされていたそうです。後に、徳吉さんが語られた物語は、磯さんによって『ぼくのおはなし』という冊子にまとめられますが、その中に「森のおはなし」という一編があ

で、僕としては、利用者さんと関わってたかったんですね、すごく。自分になんかできるわけじゃないんですけど、でも、もっと一緒にいたいなあってすごく思ってたんです。それで、できればそうかな、続けたいと思ってるかな、みたいな感じで言ったら、ほんなら私言ってきてあげるわみたいな感じで言いに行ってくれた、そして職員になれたんです。

齋藤 なるほど。利用者ともっと一緒にいたいなと思われたっていうのは、どんな思いからですか。

磯 僕、それまで、人間ってこういうもんやってまあ、そんな真剣に考えたことなかったけど、僕にはすごく魅力的な人たちでした、すごく惹かれた、こういう姿がほんとはひとの姿なんちゃうかなって思うような、なんかそんな感じを、その時の僕は持っていました。なんて言うんでしょう、世間体とか、今こういうこと言ったらあかんとか、この人との関係ではここは避けた方がいいとか、そういうのが何

ります。これは、森の中におぼけがいると言われていたけれども実際にはいなかった、というお話で、当時の磯さんの思いとも通じるものがあり、そこから磯さんと徳吉さんとのやりとりが始まったのだそうです。磯さんは、徳吉さんが語られる物語をききとり、書き起こし、最後に徳吉さんが確認するという形をとっておられました。ありのままの表現を大切にしたいとの思いから、磯さんがそこに手を加えられることはなかったそうです。

もない、すごくストレートだし、それから、悲しいなと思うこととか、すごい喜んでることとか、そういう部分はばくらとまったく一緒だったり、ちよつと違う人も中にはいますけども、でも僕は一緒やなっていう部分もけっこう強く感じました。ほんでなんかすごく、すごい力持った人やなっと思って、惹きつけられたところがあつたんです。いい面ばかりじゃないけど、反発する部分とか、けんかする部分とかあつたけど、うん・・・

山本 漠然と人の役に立ちたいという思いを持っておられたということですけど、その思いはどんなふうに育まれてきたのかなあと・・・

磯 誰でもなんかそんな言うでしょ、人の役に立ちたいとかなんか、別に深く考えてなくつても、僕全然深く考えてない。どうしたら役に立てるのかもわからんまんま、ただ漠然と。そんなに子どもの時からとかいうことはなかったですね。僕は自分の生活の環境の中で、障害持った方をたくさん目にするっていうようなことがなかったです。で、ほとんど知らなかったですね、もうほんまに頭の中で勝手に思ってるだけですね、何かの体験でっていうのはなかった。

ただ、あ、一個だけあつたんです。学生の時に、施設の奉仕作業に誘われたんです。僕、あんまり行きたいと思っ

てへんかったんやけど、まあ一緒に行けと言われたからみたいな感じで後ろの方からついて行って、施設の草刈りをしてたん。ほんで僕は時間が来て終わつたって思ってたんねんけど、せつかく来られたんだから中をご案内しますみたいなことになって。そのことは一つの、かなり大きなきっかけやったかもしれん。めっちゃ衝撃的やったんです。男性が横になつてはって、おしっこって言ったら若い女の人が、ちよつと待ってね、すぐ行くからみたいな感じですが、く明るい声で言って、ばってこうカーテンが何かで遮断して。何であの人はあんなに明るく対応してはったんやろうとか、自分がおしっこしたい時におしっこってばつと言えるんかなって、なんかすごいお母ちゃんこへんかなみたいに思えへんかなとか、いろいろ感じるこ

とがあつて。
あと、利用者のかたを紹介してくれはったりしたら、またま一人の人、自分と同じ歳やったんですね、二〇歳とかそんな感じ。ほんで、この人は、自分の今までの二〇年間でまったく違う生活をしてきはったんやなっと思ってたんですよね。そんなこと僕、それまでにたぶん全然感じたことないと思う。みんな学校行って、みんなお家で暮らして、そういうイメージしか持ててなかった。でも、障害を持っ

学校にももちろん就学猶予・免除で行けてない、全然違う人生を歩んではったんやなという。詳しい生活歴は知らないけれども、そういうようなことを思って、ずっとそのことは引きずりましたよね、たぶん、それが根っこにあったかもしれないな。で、僕できひんと思ったんです、こういうお仕事があるということも知らない、わからなかったんですけれども、絶対僕にはそんな上手にはできないなと思っててんだけど、何か自分にも役に立てる仕事ないかなと思った時に、どうせやんのやったら絶対無理やって思うところがいいかなって思った、うん。

ぶつかることが多くって・・・

磯 今は、この施設でも、就職する前に事前のオリエンテーションがありますし、職員の研修のシステムみたいなのがちゃんとシステム化されているんですけども、私が就職した昭和四八年当時は、そんな全然何もなかったんですね。僕はもうまったくそういう勉強もしてこなかったの、何もわからない状態で入って。ほんまにふつうのお兄さんがぱっと障害持った人を見た時の感覚とまったく一緒やったと思います。それから、入所施設の生活の在り方みたいなのがどうなんやっていうのは、やっぱり自分が親と

暮らしてたのとの比較みたいな感じで、よその施設と比較するとかいうような材料が自分の中にないので、違和感だらけやったんですね。はじめに説明受けてたら、もうちょっと早く前に進めたのかもしれないですけど、自分で考えていったというか、これおかしいんちゃうかなといううなことが自分の中で感じたことで動いてたところがあるので、すごく時間がかかってしまったなと思います。例えば、女性の、更衣とか排泄の介助とか入浴もそうなんですけど、僕、拒否したんですね。すごい犯罪犯してるような気分がいややったんです。それとか、なんでふろに週二回しか入れへんねんとか、なんでこんなに早い時間にめし喰うねんとか、なんで年がら年中おんなじ時間に起きて寝んとかかんねん、とか。そんなふうに、自分の中でいっぱいぶつかることが多くって。

それから、外に出たら出たで、いろいろぶつかることがあったんですね。利用者さんを連れて散歩に行ったりしたら、子ども連れの人 came した時に、何メートルか先から道をそれるんですね、無言のまま。それとか、手をつないでて歩いたら、人ごみがぶわーってふたつに分かれてしまう。まあ道をあけてくれてるっていうのもあるかもしれないけど、避けるようにしか僕には感じられないところもあったんです。それとか、一番極端な話をしたら、小学校の子

どもなんか石を投げてきたり、遠くからあほばかって言ったり。そういうのがあって、外へ出るのもすごく身構えてしまう。そういう時代やったです。

ほんで更に、そんだけのことをいろいろ思っているけれども、全然十分なことが自分としてできないし、利用者さんのことを理解したいと思いが、いっぱいけんかしたり、全然いい理解者じゃなくて、自分の思いを一方的にぶつけてしまったり、感情が先走ったり、そんなこともたくさんあったと思います。だから、こういうところに来なかったら、たぶん自分のそういういやな面というのもそんなに感じなくてすんだんかもしれんのに、こんないやな部分を自分は持ってたんかみたいなこととか、逃げてしまふ部分とか、なんかそんなんで二〇代の前半とか、ものすごいこの中でいっぱい感じるものがあつたし、もがいてたような気がする。

でも、びわこ学園に来てから、利用者さんとか職員の言わはることで、はーっと思うことがいっぱい。何でこんなことにむきになって、夜更けまで語り合っはんのかなみたいな感じですよ。ごはん食べるのに、箸がいいかスプーンがいいか手づかみがいいか、そんな話とかにものすごいみんなむきになって喋ってるから。たった一人の人のことですよ。でも、えーもうこんな時間やでとか思いながら、

だんだんだんだん自分も引きずり込まれていって、ほんで、休みの時にちよつと買い物してたら、あの子この食器やつたら使えるかもしれないとかね、この柄のスプーンやつたら持ちやすいかなとかね、なんか思ってるんですよ、影響を受けてしまつてね。

あと、はじめ、僕、わからへんから、ミーティングとかでも黙ってたんですね、まだ終わらへんのかくらいなものですよ。ほんなら、いつも職員さんがね、磯くんはどう思うの？って絶対きいてくれたんです、どの話の時でも。ほんな何か言わざるをえないですよ。いやわかりませんって言うたら、わからへんじゃないやん、そんなんいつもやってることやねんから何か思ってるやろ？みたいな、ひっぱってくれるから。ほんで、その前に、職員さんが私はこう思う私はこう思うって言うのをきいていますよね、ほな自分はどっち思うんかなとか、どう思ってるんやろう、みたいに人の話をきいてたら感じるでしょ。だから僕としたりこうかなみたいな。引きずり出してもらつたかもしれないです、はじめのうち。

齋藤 揺さぶられてた感じですね。

磯 そこは、僕はよかつたなと思います、そういうふうにしてもらえたことが。今は新しい職員さんが来ても、伝えることばかりが多いんですよ。情報として知ってもら

いたいこと、身に付けといてほしいみたいなこと、吸収せなあかんことが精一杯で。それはそうと、全然体験したことがないあなたは、今の状態をみてどう思う？っていうふうな返しはそんなたぶんできてないと思うな。

齋藤 今、入ってこられる世代の人たちに対して。

磯 うんうん。もつときいてあげてほしいなと思いますね。知らない者が初めて感じたことって、けっこう大事やつて僕は思ってるから。

伝えあい、揺さぶり、引き出し、たしかめあう

磯 常に引き出して、それを更に揺さぶってっていう、そういうやり方があるんですよ、このびわこ学園の療育のやり方が。

齋藤 表現を引き出す。

磯 そうそうそう。何もない人もちよつと揺さぶっていくんです。静かにしてはるからそんでええやないかっていうじゃなくって、ちよつと波風を立てる。そうすると何か出てくるじゃないですか。やめて、いややとかいうのでもいいんですよ、拒否でもいいし、それとか積極的に行こうとするかもしれないですよ、隠したら。ちよつと揺さぶるんです心を、で、引き出して、それだけで終わるんじゃない

くて、それを続けていく、本人さんの持つてはる力を引き出す、ほんで、ある人が気づいたら、それを伝えあったりつづけていったしとかめあったりする、そういう療育のやり方があって。

齋藤 揺さぶるっていうこと自体は、何か持つてるっていうこと前提ですよ、何か持つてるって見てるから揺さぶって引き出したろうと思うんでしょうけど。

磯 そうですね。いろんな刺激を受けてほしいという。例えば、外へ出るだけで、風にあたるだけでも刺激があるじゃないですか。葉っぱがそよいでますとか、鳥が鳴いてますとか、全部が本人さんにとったら刺激になることで、それはやっぱり屋内では感じとれないし、テレビ見ても感じられへんことだと思ふんですよ。そんな大それたことしなくたって、いくらでもそれは、こっちがそういう心向きを持つていればできることでしょ、僕そういうの好きです。

齋藤 僕も今、そういう話好きです。

磯 自分の気持ち次第で、例えば、顔洗う時でも、こっちが拭いたら清潔にはなるけれども、でもちよつと自分でタオル握ってもらうとか触れてもらって、手を動かしてもらってその手を介助する、それだけでもその人が顔拭きましたっていうふうになるでしょ。それとか、いざる人がい

て、洗面所まで歯みがきに行きましようって言う時に、僕らよくその話はしましたけれども、頑張っておいでって言うって、ここ에선どならはった、だからここからは抱っこして歯みがきに行きましたっていうんじゃないかって、ここからスタートしてもらおうねんっていう、そこまではちよつと抱っこで、自分が動けるところからスタートしたら洗面所までひとりで来れたっていうことになるやろうみたいな。同じ行為なんですけど、自分がやったっていうことがうれしく思わはったり、ちよつと自信になったり、みんなからわあすごいすごいって言ってもらえとか。そういう話ってずっとやってましたね、いっぱいやりました。

つながること、つなげていくこと

磯 ある時、ベテランの職員さんが辞めはる時に、あんたは自分が関わって、利用者さんたちはこんな力持ってはるとか、すてきな人たちなんやって思って、ここで仕事したいって思ってたねんやったら、そのことを知らせなあかんやろ、知らん人にとって言われたんです。僕はその言葉を今でもすごく覚えてます、どういう場面で言われたかということも含めて、うん。

齋藤 どういう場面やったんですか？

磯 その方がお辞めになるお別れ会みたいな時やったけども、わざわざ僕に話しかけてくれたんですよね、うん：：：ほんで、そやなって思った。やっぱりその部分で外というか世間とつながっていくという。いろんなつながり方っていうのがあると思うんですよね。みなさんがやっておられるようなお仕事なんかもすごく、そういうことが僕にはたぶんできないです。だけど、利用者さんと、ずーっと毎日のように付き合うものでしか感じられへんもんっていうのもあるでしょ？ありますよね、自分にはそのことやったらできるかなみたいのは思ったな。それは、その人の生き方の部分までは、根本の部分についての援助にはならないかもしれないけど、でも、そういう意味で一緒やみたいな。で、面白がってくれはるというか、へえーって、このお話読んで面白かったわって子どもが言ってくれたりしたら、やったって思いますよね。

齋藤 そうですよ。

磯 うん。で、もつとないの？とか、もつと読みたいけど本になつてないの？とか、大学生さんぐらいのレベルの人でも、なんかすごく、共感というか、興味を持ってくれはったりすることも実際たくさんありました。

齋藤 利用者の方の魅力をアウトプットというか、外に出せる状態にしていくのが、ある種ご自身の使命だと思われ

たのは、そのご退職された方からのメッセージがきっかけとなった感じなんでしょうか。

磯 はい。でも、その時からそれが始まったというよりも、そういうふうに関わりを感じてたことを、ここにおるんやったら、あんたはそれをやっていきいやっていうふうに後押ししてもらえたというか。ほんで、それでええんかなと思えるようになったと、うん。

この人は自分でこしらえたものがこれなんやという感じ。だからそこに手を入れたりいじったりじゃなくて、そのまんま提示したいという、そこでつながってほしいなっていうのがあったから。それから、そのことを知らない人と本人さんとの間をつなぐというのが施設職員の役割の一つ、入所の場合の、通所でも一緒かな、じゃないかなっていうふうに思いました。そこはみんなが僕は自覚した方がええんちゃうかなって思ってるし、施設もそういう役割を果たす場だと思ってるんです、個人の職員じゃなくて、全体が社会と、本人さんをつなぐ場であって、だからいっぱい外部の人を受けとめられるというか、来てもらえる機会をそこに用意しないと思うし、こちらからも出て行かないとわかってもらえないですよ。自分が感じて、その人との関係が仲良くなつて深まっていくっていうだけじゃなくって、そこをもっとちょっとずつ広げていけたら、こ

んなん作る人ってどんな人やろって思ってもらえるだけでもいいんちゃうかなって、思ってた。

かえしていくということ

齋藤 では、最後の質問でみなさんにきいてるんですけど、今後、福祉はどうあるべきかというか、そう言う大仰ですけど、僕らより下の世代というか、次の世代にですね、こういうふうにやっていってほしいみたいなことがあれば。

磯 ああ、なんやろな、福祉がどうあるべきかとかそういうのは僕には語れないけれども、それこそ糸賀一雄さんが言葉で表現されたように、やっぱり一個の人間としてね、せっかく生まれてきたんやから、やっぱり人間らしく、その人らしく、充実した人生というのを歩んでほしいわけで。それは当然の権利だと思いますね。年齢がいけばいくほどできなくなること増えてくるし、やっぱりこう弱い立場で、力も弱くって、してあげないといけないっていう部分っていうのはどうしてもあると思うんですよ。でも、やっぱりできるだけその人らしく、眠っている力も引き出すくらいの関わり方、強い関わりも時に持ちながら、どうせならいっぱい体験してもらって、よかったね、楽しかったねっ

て。けっこう危ういところもあるんです。僕は、そんな、明日明日って言うってたんじゃ間に合わへんみたいなのはものすごく、人の死を前にしては感じることもあったんで、やっぱり今やらへんかったらあかんやろって、そんな来年延ばしにばかりしてたんでは、とか、しょうがないやん、仕方ないやん、こんだけの器でしかないんやからって、そこで開き直ったらあかんやろっていうのを・・・思い続けて。それが全然、ああうまくいきましたっていう時はまったくなかったですけどね。でもやっぱり、姿勢としてはそうだと思うんですけどね。歩けへんとか喋れへんとか、そういうのは持つてはるけども、それがその人なんやし、できるだけそれが当たり前っていう感じで暮らしていつでもらせるような。ずいぶん世の中も変わってきて、非常に住み心地はよくなつてはきてますよね、昔と比べれば。

僕も退職してから、ちよつとここに介助の手伝いに来さしてもらおうと思うのは、僕はいつぱいここでいろんなことを教えてもらってきたので、でもなんか全然還せてなかったかもしれないとか、全然じゃないけれども、ほんまに微々たることしか長い年月かかってんのにできひんかったなっていうのがあって、でも、いつぱいもらったんやから、職員じゃないとできひんことっていうのも明らかにたくさんあるけれども、職員っていう立場を離れてでき

ることっていうのが、ひよつとしたら見つかるかもしれへんって思つて、今やってるんですけど。給料とかと関係なく、つながりっていうのはそんなもんで消えるもんじやないですよ。

齋藤 今、何か、目論んでいらつしやることはあるんですか。

磯 目論んではいいひんねんけど、この前ちらつと、入所してはる人の親御さんと喋つてた時に、できるかどうかわからへんけど、ボランティア組織したいねんって言わはったんです、この施設のボランティアだと思ひますけどね、親という立場で。ほんで、もしやる時には、また手伝つてつかうか、一緒にやろうというか、そんな感じで言われたんで、そんなんがあつたらいいかなと思つて。ちよつと外側から援助する、中に入り込んだ立場じゃない人間が入りしたり、関わったり、うん、それくらいですね。

齋藤 長時間にわたつて、貴重なお話をきかせていただいたてありがとうございました。

磯 いつぱい喋つてしまいました。